平成２５年度研究成果報告書《平成25年度教育課程研究指定校事業》

都道府県・指定都市番号	1	都道府県・指定都市名	北海道
学校名（生徒数）	北海道浦河高等学校（４０８人）		

（本研究に係る問い合わせ先）
所在地：北海道浦河郡浦河町東町かしわ１丁目５番１号
電話番号：０１４６－２２－３０４１
研究内容等を掲載しているウェブサイトの URL：http://www.urakawa.hokkaido-c.ed.jp

【研究成果のポイント】

○研究課題番号：４高等学校
○研究対象教科等：公民科
○研究のキーワード：教科間の連携，体験活動，「関心・意欲・態度」の育成
○研究成果のポイント：
１　他教科との連携
２　外部講師を活用した体験活動
３　「子ども理解支援ツール」による生徒の変容の把握
４　「関心・意欲・態度」の観点における評価方法の研究

【研究の目的，研究内容】

（１）研究主題

「幸福・正義・公正」についての生徒の理解を深めさせるとともに，他者とのよりよい関係を築こうとする意欲や関心を高め，態度を醸成する具体的な指導方法の研究

（２）研究主題設定の理由

本校では，平成２４年度入学生から再編統合により，普通科から総合学科に移行した。生徒は落ち着いた学校生活を送っているが，中には，他者との適切な関係を築くための規範意識やコミュニケーション能力に課題がある生徒も一部に見られる。

こうしたことから，公民科の学習をはじめとする様々な教育活動を通して，規範意識を醸成し，他者との適切なコミュニケーションを図りながら，日常生活における諸課題をよりよく解決する能力や，自ら律しつつ，他人とともに協調し，他人を思いやる心などの豊かな人間性を育成する取組の充実が必要であるため，研究主題を設定した。

（３）研究体制

本研究は，校内では，地理歴史・公民科が中心となり，教務部（校内研修及び地域小中学校と連携した公開授業の設定）や総務部（外部評価を取り入れるための公開授業の設定（学校評議員等)），家庭科（アイヌ食文化についての調理実習や道具づくり）と連携して実施する。また，校外の次の諸機関と連携して実施する。

ア　北海道浦河町郷土資料館
「和人の入植」についての講義，調査学習における資料の入手

イ　「重要無形民俗文化財保護団体」浦河ウタリ文化保存会
アイヌの民俗（踊り，生活に使用された道具，食文化等）についての実演，踊りや道具づくり，食文化の体験

ウ　北海道浦河町農林課，教育委員会社会教育課
浦河町の軽種馬産業の現状についての説明，調査学習等に向けてのアドバイス

（４）１年間の主な取組の経過

平成25年度	４月	・体験授業で連携する諸機関（郷土資料館，アイヌ協会浦河支部）との連絡調整，校内研修の日程調整
	５月	・子ども理解支援ツール「ほっと」（１回目）の実施・分析・検証
	６月	・公開授業の日程調整
	７月	・子ども理解支援ツール「ほっと」（２回目）の実施・分析・検証
	９月	・単元「差別のない社会へ」（地域の特色を生かした教材（和人の入植，アイヌ民族の生活，軽種馬産業）を用いた体験的な学習や課題研究）における「関心・意欲・態度」の評価方法の開発
	10月	・体験学習「アイヌの食文化」（公開授業） ・体験，調査学習「和人の入植」「軽種馬産業」

	11月	・子ども理解支援ツール「ほっと」（３回目）の実施・分析・検証
	12月	・地理歴史科公民科研究会発表・授業実践成果（研修集録）のまとめ
	１月	・次年度指導計画の作成
	２月	・研究成果の公開（Web ページ等）
	３月	

（５）具体的な研究内容・方法，研究を進める上での工夫点等

ア　他教科との連携

・公民科における人権の学習と家庭科における「アイヌの食文化」の体験学習を関連させ，食材を大切にするアイヌ文化を理解させることを通して，「幸福・正義・公正」について考察させた。

・「産業社会と人間」における「ポスターセッション」の学習の成果を活用し，公民科の授業において，生徒が発表する活動を取り入れた。

イ　外部講師を活用した体験活動

・アイヌ協会浦河支部の方や地域の学芸員を講師に招き，身近な題材から「幸福・正義・公正」について考察させた。

ウ　「子ども理解支援ツール」による生徒の変容の把握

・生徒の心の変化を把握するため，北海道教育委員会の子ども理解支援ツール「ほっと」を活用し，分析や検証を行った。

エ　「関心・意欲・態度」の観点における評価方法の研究

・ワークシートに記載し，ポートフォリオ形式でまとめさせた生徒の記述等から「関心・意欲・態度」の変化を把握するとともに，ルーブリック評価を取り入れ，到達すべき生徒像をＡ・Ｂ・Ｃ段階で評価した。

【研究成果とその意義等】

（１）研究成果

ア　体験学習や調査学習により，生徒の学習への関心や意欲を高めるとともに，考えを文章にまとめ発表させることにより，言語活動の充実を図ることができた。

イ　外部講師による授業の実施や，地域の諸機関との連携により，地域に根ざした学校づくりを進めることができた。

ウ　「子ども理解支援ツール」の活用により，生徒の「幸福，正義，公正」の捉え方等，他者との適切な関係を築くための判断力をデータとして把握できた。

エ　観点別評価における「関心・意欲・態度」についての評価方法の工夫を活かすことにより，定期考査において各観点のバランスの取れた評価ができた。

（２）研究成果の意義等

ア　公民科と他教科の学習内容の関連を図ることで，現代社会が抱える諸課題を身近な課題として多面的・多角的に捉えるとともに，学習の効率化を図ることができる。

イ　身近な題材や地域人材を活用することにより，生徒自身が地域の一員であることを一層認識することができる。

ウ　「幸福・正義・公正」等の基礎的な概念を意識し，生徒が学校生活の中で生ずる様々な課題の解決に取り組むことができる。

エ　評価方法の研究を通して，指導と評価の一体化を進めることができる。

（３）指定期間終了後の取組

ア　「幸福・正義・公正」等の理解を深め社会的な見方や考え方を成長させる手立てとして，身近な題材を用いる授業展開は効果的であることから，現代社会やその他の科目で取り入れる。

イ　地域人材の活用による授業について，次年度以降実施する予定の学校設定科目「地域研究」等に取り入れるなどして，継続的・発展的に実施する。

ウ　生徒の変容を定期的に把握・分析し，教員間で情報を共有することで，教育相談など積極的な生徒指導を行う雰囲気を醸成する。

エ　評価方法の開発に関する校内研修などを通じて，学校全体での評価方法や授業の改善を図る。